第２号様式（第４関係）

令和４年８月１２日

調布市議会議長　小林　市之　様

提出者　調布市議会副議長　丸田　絵美

視察等共通部分報告書

下記のとおり，視察（研修~~・視察研修~~）を実施いたしましたので，視察等個別部分報告書（第３号様式）を添えて報告いたします。

記

１　実施名称（テーマ）

市民「一人ひとりの SDGs」に向けて～調布市全体で取り組むSDGs～

２　実施期日（期間）

令和４年７月１４日（木）　午前９時４５分から１１時４５分

３　実施場所（~~視察先・~~研修会場）

調布市文化会館たづくり　映像シアター

４　実施目的

ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）のこれまで経過や現状を知ることで，議員の政策の形成及び立案の能力の向上を図る。

５　参加者の氏名　（２２人）

平野　充	木下　安子	坂内　淳	古川　陽菜
西谷　徹	澤井　慧	佐藤　尭彦	須山　妙子
内藤美貴子	榊原登志子	岸本　直子	丸田　絵美
清水　仁恵	大野　祐司	狩野　明彦	鈴木　宗貴
橘　正俊	小林　市之	雨宮　幸男	宮本　和実
大須賀浩裕	元木　勇		

調布市議会
-4.8.12
収第1340004号

6　実施結果（~~視察概要・~~研修概要）

横山泰治氏（一般社団法人サステナブルコミュニティ共創機構代表理事，パラダイムシフトコミュニケーショントレーナー，官民共創・SDGs コーチ）を講師に招き，「市民「一人ひとりのSDGs」に向けて～調布市全体で取り組む SDGs～」についての講義を行っていただいた。

横山氏は，調布市で活動をスタートされ，観光ボランティアや市観光協会のホームページ作成支援，深大寺のプレーパーク，青少年ステーション CAPS や地域情報ポータルサイト「ちょうふどっとこむ」の支援など，様々な活動を通じて調布市に多大なる貢献をされてきた。横山氏は，「誰一人取り残さない」を取組のテーマとしており，そのような中で 2017 年に SDGs と出会った。SDGs は市区町村単位での取組みが重要となっており，市民の意識的な行動も求められていくところである。

調布市では，市民意識調査の結果によると，SDGs への理解だけでなく，実際に行動に移している市民も１％程度確認できている状況である。SDGs は直訳すると「持続可能な開発目標」であり，国連で 2015 年 9 月に全会一致で採択された「世界が目指す行先」である。SDGs は 17 のゴールと 169 の具体的なターゲットで構成され，2030 年までに達成する行動計画である。

目標１「貧困をなくそう」について。新型コロナウイルスの感染拡大から，発展途上国に限らず，貧困はより身近なものとなっている。日本においても，特例貸付金（緊急小口貸付金）の制度利用は激増しており，令和３年６月には貸付総額が１兆円を突破している状況である。このことから，日本は貧困からそう遠くない国であることがわかる。

目標２「飢餓をゼロに」について。フードロスやフードバンクの活動はあるが，「余ったからあげる」「作りすぎたからあげる」という発想は，本質的な部分で貰い手の立場に立てていない。現状への理解を進める必要がある。

目標３「すべての人に健康と福祉を」について。新型コロナウイルスにはポリオが引き合いに出される。ポリオのワクチン開発者は「ワクチンに特許は存在しない。なぜなら太陽の光に特許は存在しないから」とした結果，世界の発症例は極めて少なくなった。しかしながら，アフガニスタンやパキスタンなど紛争等で厳しい状況にある地域は，こうした予防接種を十分に受けられず，最も影響を受けることとなる。

目標４「質の高い教育をみんなに」について。日本人は識字率が高いと言われているが，最後の識字率の調査は 1960 年である。日本は 2003 年から，コミュニケーション能力である読解力は下がっており，「自分の意見を言うのが怖い」という子どもが増えている。
日本における「質の高い教育」がどのようなものか，考える必要がある。

目標５「ジェンダー平等を実現しよう」について。日本は教育の水準は高いにも関わらず，ジェンダー平等に対する意識は先進国の中で特に低い。「男らしく」「女らしく」などの表現を耳にするのは，いまだに意識が低い証拠である。

目標６「安全な水とトイレを世界中に」について。日本は一見問題ないように感じるが，水資源については輸入食料に使用される水「バーチャルウォーター」という考え方があり，この点において食料自給率の低い日本は他国の水資源に頼る状況である。

目標７「エネルギーをみんなに　そしてクリーンに」・８「働きがいも経済成長も」について。エネルギーは 2011 年以降，日本にとって喫緊の課題。SDGs は経済成長を否定するものではないが，「働きがい」など経済成長以外にも尊重されるべきものはある。

目標９「産業と技術革新の基盤を作ろう」について。これは，「便利なものは誰でも便利に使えるようにする」ということであり，インフラや，その他様々なツールは本当に皆が便利に使えるものになっているか，ということである。

目標 10「人や国の不平等をなくそう」について。貧困やジェンダ

ーは前述のとおり，日本はまだ解決されていないのが現状である。

目標 11「住み続けられるまちづくりを」について。防災・減災の視点はこの目標に属する。自然災害の多い日本で，震災からの復興や私たちが日々心掛けている命や財産を守る取組みは世界の基準になっている。

目標 12「つくる責任　つかう責任」について。大量消費が悪ということではなく，一人一人が生活していく中でどのくらいの消費をしているかを意識することが重要である。

残りの５つの目標のうち 13「気候変動に具体的な対策を」14「海の豊かさを守ろう」15「陸の豊かさも守ろう」について。新型コロナウイルスによる影響は，製造活動（工場稼働や希少鉱石の採掘など）の中止などで環境破壊や生態系への改善に寄与することもある。こうした環境問題は広域な連携が必要となる。

目標 16「平和と公正をすべての人に」について。2030 年は不可逆なポイントと呼ばれ，元のシナリオに戻れる分岐点がなくなると言われている。

目標 17「パートナーシップで目標を達成しよう」について。５つの P で構成され，People（人間）・Prosperity（繁栄）・planet（地球）・Peace（平和）・Partnership（パートナーシップ）の観点から，未来に持続可能な世界を実現していくものである。

これら 17 の目標は行先＝方向性であり，達成し続けなければならない。そして，目標を具体化したものとして 169 のターゲットがある。さらに，目標の達成度を確認するための 231 の指標がある。SDGs は世界の共通言語であり，日本社会にとっても生存戦略である。SDGs の達成に当たっては，一人一人が創造的に，自由に考え活動してよく，誰一人取り残さない社会の実現に向け，調布は調布の道を歩めるものである。

7　その他　　特になし

8　実施結果に対する所感，意見等

視察等個別部分報告書のとおり

第３号様式(第４関係)

視察等個別部分報告書	作成者氏名	平野　充

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

東京都市議会議員研修会　　令和4年7月14日

調布市文化会館たづくり映像シアター

【研修演題】

「市民「一人ひとりのSDGs」に向けて

【講師】

一般社団法人サステナブルコミュニティ共創機構代表理事

横山　泰治　氏

２　実施結果に対する所感，意見等

（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

各地、各機関と連携しSDGsの活動を展開する横山泰治氏の講義は大変有意義でした。この度の研修会ではSDGsの考え方や取組みを横山氏の考察として具体的な事例を通して学ぶことができました。SDGsは２０３０年までの行動計画と定められているが、「ここまでで到達点」というより、「ずっと続けていかなければならないこと」として、全世界の人々の意識が定着していってこそ、本当の意味があるとの観点は改めて大事だと思いました。

世界の中では私たちが生きる比較的裕福な日本の国においてでも１７の目標のうち１番目「貧困をなくそう」では、コロナ禍における特例貸付金の利用件数や金額においても月に１００億円ずつ増加し、１７世帯に１世帯が貸し付けを受けている現状は、各国での生活レベルや様式の違いがある中での日本の大きな課題でもあると感じた。

目標３番目の「すべての人に健康と福祉を」では、かつてポリオワクチンを開発したジョナス・ソーク博士の言葉「特許

は存在しない。なぜなら、太陽に特許は存在しないから」を紹介され、そのまま SDGs の精神に直結する素晴らしい人間性に心を打たれました。目標５番目の「ジェンダー平等を実現しよう」では、日本の国が特に遅れていることを再確認できました。島国で精神の進化が遅れているためか、情けなさを感じました。

全体を通して感じたことは、「弱者に対し何かを施してあげる」ではなく「すべての人々を活かしながら調和を図っていく」考えが大事であると感じました。また、そこには「誰もが幸せを感じながら生きていく」ことが大事でもあること。

SDGs は全世界（地球）が舞台であるが、シンクグローバリー・アクト・ローカリーの考えに立って、日本で行うべきこと、調布市内で行うべきこと、そして自分自身で行っていくべきことを真剣に考えながらの行動や施策が重要であることを感じました。

３　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

研修会では１点質問をしました。

世界の差別をなくし貧困をなくすための寄付についても、

人の善意につけこむ詐欺への対応は、目標４の「質の高い教育」が重要になってくるのかを伺いました。

納得できるような明快な答えではありませんでしたが、「連帯してそれらへも対応（対処）していかなければならない」との横山氏からのお答えを頂けました。

調布市は詐欺被害の多い地域でもあり、それは裏返して言えば、調布市民の「純粋さ」「人の良さ」を狙われた悔しく不名誉な結果になっているため、今後も課題認識をもって取組みたいと思います。

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	木下安子

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

調布市議会議員研修 2022 年 7 月 14 日(木)

「市民『一人ひとりの SDGs』に向けて～調布市全体で取り組む SDGs～」

横山泰治氏

２　実施結果に対する所感，意見等

（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

横山氏から SDGs とは何か、日本の取組みの現状への評価や今後の課題などについてお話を伺い、基礎自治体でもしっかりと SDGs で示された共通目標を見つめながら、世界とともに社会の改善に取り組むことの重要性について改めて考えさせられた。

SDGs はスタート当初、途上国支援との受け止めもあったようだが、もはやどのゴールも今の日本と無関係とは言えない。貧困格差はコロナ禍で拡大を続け、育ちざかりの子どもさえ食が十分に保障されないのが現状だ。先進国で最低レベルにあるジェンダーギャップの問題、気候変動対策、自然環境保全など、『持続可能な開発報告書』でも複数のテーマについても課題があると指摘されている。横山氏も指摘されていたが、「達成済み」の評価を受けている教育でさえ、主権者教育の遅れや、子どもたちの自己肯定感や幸福度の低さを考えれば、果たして本当に質の高い教育と呼べるのか疑問視しなければならないのではないか。このように見ていくと、どのゴールも調布市に引き寄せて向かわなければならないものばかりだ。

現在、調布市では各施策と 17 のゴールのうち関連があるものをリンクさせている。しかし、関連づけることにより、施策を行うことがゴール達成への取組みとなっているという考えなのだが、業務を行う中での意識づけにはつながっていないのではないかと懸念している。新しい基本構想の最終年が SDGs の目標年である 2030 年と重なるので、次期基本計画を実行する中では、日常業務の中で SDGs を意識できるように改善を求めたい。横山氏は次期基本構想の策定推進市民会議で参加と協働のまちづくりアドバイザーを務めてくださっている。「誰一人取り残さない社会」を目指す SDGs の理念を

次期基本計画にもしっかりと反映させ、縦割りになりがちな行政が互いの影響を意識し合いながら横の連携を強めていけるよう、良きアドバイザーとなってくださることを願っている。

行政が SDGs を意識する意義の一つは、SDGs は 17 のゴールに向けた個々の取組みの中で、他のゴールへの取組みが大きく後退することがないかを意識することを大切にしている点だと考える。貧困対策は進んだが、環境破壊が進み、男女格差が拡大した、ということでは全体としての取組みは後退したことになる。逆に、講演で紹介されていたように、ある一つのゴールに対する取組みが、他のゴールへの取組みを前進させることもある。先にも述べたが、とかく行政は縦割りになりがちだが、今の社会が直面している課題を解決するには、部署をまたいだ横の連携や広い視野に立った想像力が求められる。若い世代を中心に危機感が広がる気候変動危機への対策は、福祉や経済、まちづくりなど他の分野との関連性をもっと意識すれば、全庁的に取組みを進めることができるだろう。SDGs のゴールのどれをどの部署が担当するかということだけではなく、すべての部署が 17 のゴールを意識しながら担当する施策を進めることが重要なのだと思う。横山氏によると、SDGs 推進課といった横断的部署を設けている自治体もあるということだが、その余裕がないのであれば、全庁的な意識づけでカバーすることは可能だろう。

行政職員が SDGs を意識して業務に当たることも重要だが、公の役割の位置づけや仕組みづくり、予算配分、政策づくりなど、首長を含め、政治家の責任も大きい。私自身誰一人取り残さない社会の実現をしっかりと目標に定め、SDGs の達成に寄与できるよう行政チェックを行うだけでなく、建設的な政策提案をしていきたい。

３　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）
2 に記載

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	坂内　淳
１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）		
令和４年度　調布市議会議員研修会　市民「一人ひとりの SDGs」に向けて		
２　実施結果に対する所感，意見等 （質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）		

われわれ地方議員にとって日々相談などで直面している問題について、SDGSの人の６つの目標について具体的数値を示していただいたことはよかった。特に１貧困と５ジェンダー平等。また質疑もふくめて　日本政府がこの二つについての数値を正確に出していないことも現場(地方)からも早急な改善を求める必要があると感じた。なぜなら正確な現状把握がなければ　解決のための資源配分も行われないからだ。

飢餓についてもフードドライブ利用者数の現状やコロナひっ迫での医療アクセス問題など明らかになった課題や、上下水道事業の広域化や民間への包括委託など　本市においても SDGs からの検討が必要なテーマもあるだけにこの分野に絞って講義と質疑をした方がよかったかもしれない。

　ジェンダー平等の点では　日本人は特にそういう社会的傾向があるのだが、その人の所属集団や属性で標準的行動パターンをモデル化して言語化することからどう脱却するかは課題だろう。講師も悪気はまったくないと思うが「中学生の女の子」が「こういう文章を書いてる」みたいな言い方をしてしまう。社会問題に関心が高い人たちの中でも「若い人でも社会に関心ある」とかいう言い方をしがち。若いころ私が属していた研究団体では学生も教授もそのあつまりでは「さん」づけを徹底して対等の個人としての立場で責任もってものをいうことを徹底していたから、まずそうした点からも大人や年長者、男性など社会的優位性のある側からの改革提案が必要なのではないだろうか？

　また意識の面だけでなく　「本人のニーズにあった選択の結果」とされている本市の会計年度任用職員の男女・年齢構成(女性が圧倒的多数でＭ字型構造)についてもジェンダー平等の観点から検討や議論が必要だ。

講師がSDGsの取組の一例としてあげた、縫製品の例は市場システムによる事後チェックであるが、社会に問題を喚起するうえでは大事な取り組みだが、目指すべきは生産過程にSDGsの目標との関係で阻害要因になるようなことを排除するルールをつくることではないか？その過程に多くの市民が参加するうえでも最低賃金と教育、労働時間の短縮などの国内・国際ルールの構築が必要だ。

最初に講師が投げかけた目標問題は　SDGs において必要な目標、ゴールを明確にして逆算で課題解決のステップを明らかにして取り組む必要がある段階であるということにつなげたかったのだと思う。概ね同意するけれど、今の現状は　世界中で過剰に剰余価値の生産を至上命題とした資本主義システムに人々を巻き込んでいった結果という側面も絶対にある。今　若い人の間におきているミニマリズム志向はその行き過ぎの反映では無いか？

政府のソサエティ5.0とか「まち・ひと・しごと創生総合戦略」にはそうした問題意識はない。ここで言われている課題を達成するだけではSDGs の実現にはつながらないと思う。

私は石油ショックの時は子どもだったから、そのあとはエネルギー効率を考えた社会になるかなと思っていたが、1980 年代以降今に至るまで　そうなっていないし、むしろ逆だった。世の中の流れにあわせず無駄使いしないことはものすごく疲れることでそう簡単ではなかった。

政治経済社会システムの問題を不問にしては問題は解決しないし、基礎的な事実やデータは共有した上で当面の対立する同士が、将来の利益のために妥協点を見出していくという過程は不可避だ。人間社会の維持するための未来の条件について情報共有するためには教育(リテラシー能力)の課題もある。日本ではコロナ感染拡大以降の2年半経過したが人間とコロナウイルスについての事実にもとづく共通理解の形成ははなはな不十分ではないか？スローガンが「コロナとのたたかい」から「ウィズコロナ」に変わっただけで現象そのものの具体的な理解を政府が進めようとしていたとは思えない。

学術会議問題や原発　外環でもそうだが、SDGs の実現のためには　政府の役に立つか立たないかではなく、世界を理解するツールとしての科学に対する敬意をもった政府を作ることが必要だ。

３　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

資源やエネルギーの使用について生産・流通・廃棄までトータルの指標が必要だ。地質学的時間を通じて形成された化石燃料や石灰石、鉄などを短時間で循環サイクルの中に放り込んだことが　地球環境問題の大きな原因なので。開発計画そのものを SDGs の視点から見直すこと、土地利用も含めて。

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	古川　陽菜

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

令和４年度　調布市議会議員研修

「市民一人ひとりのＳＤＧｓ」に向けて～調布市全体で取り組むＳＤＧｓ～」

講師:一般社団法人サステナブルコミュニティ共創機構代表理事　横山泰治氏

２　実施結果に対する所感，意見等

（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

今年度の議員研修は、「市民一人ひとりのＳＤＧｓに向けて～調布市全体で取り組むＳＤＧｓ～」というテーマで、2001 年には調布市観光協会の事務局にお勤めになり、調布の観光業などに尽力されてきた横山泰治氏にお話を伺った。

昨年度の東京都市議会議員研修会の東京都立大学の阿部氏の話の中にもあったが、近年の日本の子どもの貧困の実態は驚くべきものがある。ＳＤＧｓの食品ロスに関しても、日本は賞味期限切れなどで多くの食べ物を捨てているイメージが強かったが、今回のお話の中で日本の中学校１学区域内に100 名以上のその日の食べ物がない状態の人がいるという話を聞き、貧困が子ども達の身近な存在になっていることに改めて驚かされた。

横山氏は、お話の中でＳＤＧｓのゴールを達成するために、それぞれの個人や地方自治体が指標を決めていいということや、ＳＤＧｓのそれぞれのゴールは繋がっていて切り離せないものであり、行政側はそれぞれのゴールの担当を決めるのではなく、全庁横断的に取り組む必要があると話されていた。よって、調布市においても、ＳＤＧｓのゴール達成のための市独自の指標を作成し、達成に向けて取り組み、さらにＳＤＧｓ推進課のような取りまとめの課を設置することは有効であると考える。

３　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

すべて本文中に記載。

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	西谷　徹

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

「市民「一人ひとりの SDGs」に向けて～調布市全体で取り組む SDGs～」

２　実施結果に対する所感，意見等
（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

ＳＤＧｓが掲げるさまざまな項目について、関連性などいろいろ考えさせられました。講義後半で肌着の自動販売機の話が出てきました。販売価格が安いので買おうとお金を投入すると子どもたちが安い賃金で肌着を作っている映像が映し出されるというものです。だまし討ちのようでこのやり方はどうかとも思うのですが私も含め購入者側は安い製品の背景をそこまで考えずに日々購入しています。正直それを見て募金したところで本当にこの子達に募金の寄付が届くのか？この事業を批判することでこの子達に払われるほんの少しの給金さえ奪ってしまうことになるのではないか？様々な思惑が想定される中で講師の方が「いろいろな考えがあり議論するきっかけになることが大事」と、おっしゃっていました。
自分たちにもそれぞれ生活がありまずはそれを優先する中で他者に対し「自分たちができるところから始める」当たり前ですが一人一人がそのように考え、行動していくことが大事なのだと感じました。調布市もＳＤＧｓを推進し、少しでも良い社会になるよう努めています。そのお手伝いができるよう私自身も考えて行動していきます。

３　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

自分のできる範囲で取り組むＳＤＧｓについてほり進めていくこと

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	澤井　慧

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

議員研修（令和４年７月 14 日）

「市民一人ひとりの SDGｓに向けて」～調布市全体で取り組むＳＤＧｓ～

講師：横山　泰治氏

２　実施結果に対する所感，意見等

（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

SDGｓは 2015 年に国連で採択された、人間、地球の持続可能な開発のための行動目標のことで、2030 年までに達成すべき 17 の目標と、169 のターゲットが示されている。
SDGｓを市全体で取り組む上で SDGｓの本質を明確に理解する必要がある。

本質①課題が不可分であること
SDGs が掲げる 17 の目標は、互いに関連しあいながら、総合的に取り組むことが大切である。社会問題が多様化、複雑化する中で、市民のニーズに対して単独の分野や専門領域のみで解決することが難しくなっている。ますます予測が不可能となっていく時代においては、常に変化しつつある環境の中で、多角的に物事をとらえ、状況の変化に迅速に対応していく必要がある。
本質②誰ひとり取り残さないこと
SDGs が掲げる「誰一人取り残さない」という理念は、地方自治体においても通じるものである。本市においても各施策とSDGsの17の目標を関連付けているが、SDGsというテーマは大きいので　ローカル指標作成して、身近な取り組みとしてとらえる必要がある。
本質③2030 年の未来をから逆算して行動すること
これから８年後に目指すべき未来の姿を自分で描くことが重要である。「どんな世界が訪れるのか」、あるいは「どんな未来を創りたいか」を考えることで、現在の行動を変化させる必要がある。

SDGｓの採択文書のタイトルに明記されている、“我々の世界を変えること”（transforming our world）の実現に向けて、地域社会の身近な取り組みから行動していきたいと思う。

３　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	佐藤尭彦

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

令和４年度調布市議会議員研修
「市民『一人ひとりの SDGs』に向けて～調布市全体で取り組む SDGs～

２　実施結果に対する所感，意見等
（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

SDGs について見識を深めることができるとても有意義な研修だった。SDGs の意義について改めて確認するとともに、曖昧な概念である SDGs をいかにして説明するかのヒントを多く得ることができた。若い世代では SDGs についての理解が広がっているとはいえ、SDGs の考え方の根底にある「持続可能性」についてきちんとした理解が得られていない人はまだまだ多い。今回の研修では SDGs について大変詳しく、そしてわかりやすい説明を受けられたので、今後行政や議会から説明する上でとても参考になるものであった。

また、直前に会派の行政視察で訪れた松山市において、SDGs モデル事業の取り組みについて勉強していたため、より研修から多くの学びを得られたと感じる。松山市への行政視察で多くのことを学んだが、中でも最も印象に残ったのは SDGs を推進する部局横断型組織を作り上げたことである。個々の部署に任せて、たとえば「SDGs 推進課」のような部署を作って対応するのではなく、市長をトップに据えて全部局長が構成員となる組織を作ったことで、松山市は SDGs の目標推進に向けて強い推進力を得るのに成功した。

上記の二つを併せて、今後の調布の市政に大いに生かせるものであったと感じている。

３　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

まずは SDGs のさらなる実現に向けて、組織の在り方というものを考えていく必要があると感じる。まちづくり、福祉、教育といった分野ごとに SDGs をばらばらに進めていくのは難しいと感じている。一つの大きな理念を進めていくためには、松山市のような部局横断型の組織作り、もしくはそれに代わる強力な推進体が必要であろう。今後 2030 年の目標達成に向けた行程と

進捗状況を可視化し、実現可能性を吟味していくことになる。その中でどうしても目標達成が困難であると感じるようであれば、大きな推進力を得られるような仕組みの導入を早急に検討しなければならない。

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	須山妙子

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

調布市議会議員研修会
市民「一人ひとりの SDGｓ」に向けて
～調布市全体で取り組むＳＤＧｓ～

２　実施結果に対する所感，意見等
（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

Think Globally Act Locally とは地球規模で考え、足元から行動せよとの標語である。特に環境問題の分野では６０年も前から提唱されている言葉だが、今更にその重みを増してきている。

講師は２０代からまさにこの標語を体現されてきた。SDGｓの達成を多様な世代や環境の一般市民、一般社会人、何よりも若者からのボトムアップで実現するとの視点からの講演は示唆に富むものとなった。

SDGｓの 17 のゴールについて５つのＰの枠の中での説明は具体性があった。中でも「２.飢餓を０に」において中学生が学区域の中にその日の食べ物がない状態の人が１００人もいるとの気づき。そして「5ジェンダー平等を実現しよう」において高校生が「女のくせにや女らしくと言われなくなったらジェンダー平等の実現」との指標を明らかにしたというエピソードはSDGｓの実現が社会にとっていかに重要であるか痛感できた。私もそれぞれのゴールに私自身の指標をたてて行動を開始したいと思っている。そのためにも住民の皆様とよく語り合っていきたい。

現在策定が進んでいる市の基本構想にも SDGｓの視点が盛り込まれる。大いに期待したい。

３　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

上記

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	内藤　美貴子

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

令和４年度調布市議会議員研修

２　実施結果に対する所感，意見等
（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

講演：「市民「一人ひとりのＳＤＧｓ」に向けて
～調布市全体で取り組むＳＤＧｓ～」

講師：一般社団法人サステナブルコミュニティ共創機構
代表理事　横山　泰治氏

SDGsは2015年９月、国連の持続可能は開発サミットにおいて全会一致で採択され、国連加盟１９３か国が２０１６年から２０３０年の１５年間で達成する行動計画です。2030年に向けて１７の大きな目標があり、それらを達成するための具体的な169の指標で構成されている。

今回の研修会で17の目標にある背景や現状、世界から見た日本の現状等を伺い、企業・団体、自治体はもちろんのこと、一人ひとりが自分のこととして考え、計画を進めるためには何ができるのか。目標に向かって逆算して行動することの重要性を学ばせていただいた。また、政策に活かす上で大切なことはSDGｓの本質を理解することが重要だといわれた。本質の１つ目は格差の解消、人的・物質的資源を有効に利活用しながら、いきいきと生活するための成長パターンを見出すことだといわれている。持続不可能から持続可能に変革できるような取り組みが大切だと認識した。２つ目は、「誰一人取り残さない」です。SDGｓの達成まで残り10年となった2020年に新型コロナ感染症の拡大が始まり、地域経済や住民生活に大きな影響を及ぼした。これにより、すべてのSDGｓの目標で進捗状況の交代がみられているといわれている。しかし、テレワークの急増により、働き方への変革、地方に人が流れる動きが増えていること等、新たな価値観が生まれ、誰もが活躍する社会の推進が改めて重要だと認識した。

３つ目は「未来志向」で、未来から逆算した行動(バックキャスティング)で、現状を改善していくだけではなく、今ある環境とは根本的に異なる発想を引き出すことが重要だと認識した。

３　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	榊原　登志子

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

「市民「一人ひとりの SDGs」に向けて～調布市全体で取り組む SDGs～」

講師：横山　泰治（よこやま　やすはる）氏

一般社団法人サスティナブルコミュニティ共創機構代表理事、

パラダイムシフトコミュニケーショントレーナー、

官民共創・SDGs コーチ

２　実施結果に対する所感，意見等

（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

世界の人々は、便利で豊かな暮らしとするため産業の活性化を進めてきた。第１次産業革命から今日まで発展を遂げてきた世界だが、発展の中で環境などへの負荷をかけてきたことは間違いない事であり、犠牲としてやむを得ない中、進められてきた。

一つに水俣病は、まさに環境破壊でありその被害の大きさと計り知れない影響の深刻さにおいて、人類の歴史上、これまでない類例がない公害となった代表例である。世界的規模でみれば 1946 年以降、英国、米国、仏、ロシアなどの国では、核開発による核廃棄物が大量に発生したことから核廃棄物の処理としてコストのかからない方法の一つとして固体、液体とも直接、海洋投棄することを選択した。日本においても同様であり 13 ヶ国もの国が海洋投棄を行っていた。その核の廃棄物は、海洋で希釈されるなどと考えられたようだが、環境汚染のほかならない。最終的には、汚染された魚などを食べていることになると感じている。1993 年にロンドン条約が批准され放射性物質の海洋投棄は、全て禁止され行われていないが腐敗したドラム缶が深海に残っている事などを考えると永い年月の環境破壊である。原発施設の稼働によって廃棄物が発生し今後、海洋放水が日本で行われるが重要な環境負荷であり、SDGs の観点からすると疑問が残ると私は、考える。他の大きな問題として世界の中で必ずと言って良いほど紛争が発生しており、紛争に巻き込まれた子どもたちが、飢餓の状態になっている。この飢餓の状態を無くす、解決することが最も急務に取り組まなければならないと思っている。

私たちの身近な観点としてプラスチックについては、代表的なリサイクル問題であり今日まで続けてきた環境負荷をとめなければならない。SDGs の 17 の目標は私たちが生活をする中で、どれも欠かすことができない目標として個人的にも地道に取り組まなければならない。しかし自治体や個人では、限界があるため、企業との協力のもと SDGs の取組みを進めていけることが望ましいと思うところである。

第１次産業から第３次産業がそれぞれの役割を果たしてきたが今後、第４次産業の急速な発展となることから、連携した取組みを行っていくことなども必要ではないだろうか。

また、第５次産業の発展に向かっている今日では、地域での食糧生産、受給

が進み、その自治体ならではの取組みが進めていけることができる策を探っていきたい。
３　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）
・調布市においては、第１次産業から第６次産業の取組みとしてＮＴＴと実証実験が行われていることから、今後も研究も重ねていく。

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	岸本　直子

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

2022 年 7 月 14 日

市民『一人ひとりのＳＤＧｓ』に向けて

～調布市全体でとりくむＳＤＧｓ～

講師　一般社団法人サステナブルコミュニティ共創機構代表理事

パラダイムシフトコミュニケーショントレーナー

官民共創・SDGｓコーチ(2030SDGs・SDGs de 地方創生・SDGs Get The Point

公認ファシリテーター　横山　泰治氏

２　実施結果に対する所感，意見等

（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

2015 年 9 月末に開かれた国連の首脳会合で、国際社会の新たな共通の行動計画となる最終文書「持続可能な開発目標 Sustainable Development Goals」を全会一致で採択し、豊かで公正な世界をつくることを新たにめざすために 17 目標 169 項目を掲げた。SDGs は国連加盟 193 カ国が、2016 年～2030 年の 15 年間で達成する行動計画であり、17 の目標と達成のための 169 のターゲットで構成されている。

これまで大震災による被災者支援や調布市観光協会、花火大会実行委員会、調布ぬくもりステーションの受託など、調布市を拠点に様々な場面で力を発揮されてきた講師から、現場ならではのお話を伺えると期待し聴講させていただいた。それぞれの課題について講師から以下の提起を受けた。

●１、貧困をなくそう(あらゆる場所であらゆる形態の貧困に終止符をうつ)について

…特例貸付金の利用件数について 2020 年以前は年間 7 万件ほどだったが、2020 年 3 月 26 日～5 月 9 日までで 186,000 件 2011 年比で 2.6 倍。

2020 年 7 月 25 日までの 4 ヶ月で 788,000 件と社会福祉協議会が見込んでいた 2,000 億円を超えた。2021 年 1 月 2 日までの 9 ヶ月で 1,425,042 件と増え続け、2021 年 6 月 19 日には金額が 1 兆 130 億円を超え、2022 年 7 月 2

日には１兆 4,022 億円あまりとなり、貸付決定件数は 328 万件、世帯にすれば 17 世帯に１世帯が貸付を受けている状況とのこと。

●２、飢餓をゼロに(飢餓に終止符を打ち、食糧の安定確保と栄養状態の改善を達成するとともに、持続可能な農業を継続する)について

…フードロスの問題が可視化されとりくみも始まっているが、身近なところでは、コンビニやスーパーで買い物をする際に消費期限の近いものから買うようにする、プラスティックの削減のためにストローやスーパー袋の削減などがあるが、フードロスに対するとりくみも始まっているが、これまで日本人は毎日どんぶり１杯分を捨てているとも言われており、長期の学校休業期間の給食休止により痩せてしまう子どもがいる、１学区内に１００名以上のその日の食べ物がない状態の人がいるなど社会問題化している。

●３，すべての人に健康と福祉を(あらゆる年齢のすべての人の健康的な生活を保障し、福祉を推進する)について

…すべての人への健康と福祉の今の状況はどうなっているか。

新型コロナウイルス感染症は、初めての世界的な伝染病ではなく、１９８８年にはポリオ（５才未満の子どもに感染しやすく感染力は強い。四肢の麻痺を起こし命に関わることもある。現在はワクチン接種により予防が可能は疾病となった）が、世界１２５カ国で感染が広がり、当時ワクチンを開発したジョナス・ソーク博士は「特許というものは存在しない。なぜなら太陽は特許に存在しないからだ」と述べたとのこと。どの伝染病も発症したら永遠に研究開発が必要なのだな、と私は受け止めた。

●４、質の高い教育をみんなに(すべての人に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し生涯学習の機会を促進する)について

…質の高い教育とはなにか

日本で行われた国民の識字率調査は 1960 年でそれ以降行われていないが、2000 年の調査では数学的リテラシーは第１位、科学的リテラシーは第２位、読解力第８位となり、2003 年は数学的リテラシー第６位、読解力第１４位と急落。２０１８年も数学的リテラシーは第１位。読解力は第１１位

とのこと。
私自身は、この順位の差が高ければいいという思いを持っていないが、この差に何があるのかについての言及はなかった。

●５、ジェンダー平等を実現しよう(ジェンダー平等を達成しすべての女性と女児のエンパワーメントを図る)について
…日本のジェンダー平等指数は低く、教育水準は高いのにジェンダー平等ができていない国の４カ国の中に入っているという。
パワーポイントの資料で示された、『言ったり、言われたり、聞いたりしていませんか　「男のくせに」「男なら」「男らしく」「女のくせに」「女なら」「女らしく」』という言葉を聞き、いま１０～２０代の新時代を生きる若者層にもこうした言葉があたりまえに使われ、ジェンダー平等の理念は広がりつつあるが、まだまだ日常生活の中で浸透していないのだということを再確認した思いだった。沖縄県では、女性が選挙に立候補すると、いまだに相手候補から「台所へ帰れ」と言われることがあるという。

●６、安全な水とトイレを世界中に(すべての人に水と衛生へのアクセスと持続可能な管理を確保する)について
…安全な水とトイレはだれのものか
日本国内でまかなわれている水は 23%、食料や畜産物を輸入し消費している国において輸入した食料を自国で生産すると仮定した時に必要と推定されるバーチャルウオーターは７７％であり、アメリカでは穀倉地帯で地下水が枯渇しており、自国で水をまかなう重要性は、ますます求められている考えた。
●そのほかに、7，エネルギーをみんなでそしてクリーンに…では自給率の課題　８，働きがいも経済成長も…では SDGs では経済成長は否定せず、働き方についての問題も提起しているということ、9．産業を技術革新の基盤をつくろう…ものづくりの大切さ　10、人や国の不平等をなくそう…格差拡大を解消する　11、住み続けられるまちづくりを…防災も含め安心して暮らせるようにする　12、つくる責任、つかう責任…使った後のゴミの問題を含

め責任がある問題など多岐にわたって提起された。
●13，気候変動に具体的な対策を　14、海の豊かさを守ろう　15、地区の豊かさも守ろう　16、平和と公正をすべての人に　17、パートナーシップで目標を達成しよう。
「なぜこの５つが分けられてあるのか」ということについては、どの問題もみんなで分けて使うことはできないものだからとのことだった。

■「まち・ひと・仕事創生基本方針 2021」の考え方」「まち・ひとしごと創生総合戦略 2022 改訂版」の概略も説明され、ここでは「新しい時代の流れを力にする」「多様な人材の活躍を推進する」ということが紹介され、「企業に問われていること」としてたとえば、気候危機などへの対応がＣＯ２削減、産業や雇用に影響をあたえる課題が発生するなど、一つの目標達成をとっても、その他の目標に過大な影響をあたえる場合も多く、これらのバランスをとることは大きな課題とのこと。
講師の話ではマルチベネフィット（複数の社会課題の同時解決）が紹介されていたが一筋縄ではいかない難しさも感じた。また企業に問われていることの中で SDGs の本質として「不可分性」＝つまり分けることができない一体性という意味合いだが、例示として企業と石巻と世界はつながっているとし、それぞれが単独で存在しているのではないと述べた。また、SDGs の本質として「誰ひとり取り残さない-弱さがあっても怖さがない社会」、「未来志向(バックキャスティング＝未来から逆算した行動)について述べていた。

（私の所感）
どれも重要な地球的規模での難問であり解決しなくてはならない課題であることは確かだ。しかも SDGs で掲げた目標を本気で達成するためには、社会のしくみ、政治分野でのとり組みの変更も余儀なくされてくる。
目標を掲げつつも「SDGs ウォッシュ（やっているふり）」に目を奪われたり、あるいは警戒感から SDGs に取り組むのをためらう例もあるという中で、どうやって浸透させていくのかは大きな課題だ。

■SDGs では、持続可能な開発を実現するために、経済・社会・環境の３つの側面を調和させるべきだと強調している。
発展途上国だけでなく、「すべての国に適用されるもの」であり、「世界全体の普遍的な目標とターゲット」とされていることは前例のない画期的な点で、その前文に「我々は、人類の貧困の恐怖及び欠乏の専制から解き放ち、地球を癒し安全にすることを決意している。」、「この共同の旅路に乗り出すにあたり、誰一人取り残さないことを誓う」と述べていることはとても大事な視点だと考える。
特に最近、新型コロナ感染症によってあらためて浮き彫りになった社会のゆがみともいえる課題を SDGs にそって是正する事が求められてくると考える。
　SDGs の達成度や進み具合に関する国際レポート『持続可能な開発レポート』2021 年版によれば、日本の評価は世界で 18 位だが、とくに進み具合が低い分野としてジェンダー平等（目標 5)、不平等の是正（目標 10)、気候変動対策（目標 13)、海の豊かさ（目標 14）が上がっている。ジェンダー平等については、世界経済フォーラムが 2022 年 3 月に発表したジェンダーギャップ指数で日本が 156 カ国中 120 位という深刻な状況だ。

　SDGs のもともとの出発点は「あらゆる場所であらゆる形態の貧困に終止符を打つ」（目標 1)、「ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る」（目標 5)、「気候変動とその影響に立ち向かうため、緊急対策を取る」（目標 13)、「すべての人々のための包摂的かつ持続可能な経済成長、雇用およびディーセント・ワークを推進する」（目標 8)、感染症への対処を含む「あらゆる年齢とすべての人々の健康な生活の確保」（目標 3)、「公正、平和かつ包摂的な社会を推進する」（目標 16）など、SDGs が提起している重要なポイントを踏まえ、日本社会のゆがみの是正にとりくみために、地方自治体でなにができるのか、どう是正させていくのかは大きな課題だ。
●地方自治体といえども、市民参加を充実させ、独自目標・計画の導入が求められており、市民の目線で日本の社会が抱える問題をチェックしていくし

くみも必要だと思う。
SDGs はもともと、各分野の目標を達成するために、各国が独自の計画をたてて取り組むことができることになっているが、日本ではそれに必要な基本的な調査は不充分なのが実態だ。国が責任を持って信頼できるデータ・統計を作成し、地方自治体や国民が主体的にかかわって目標・計画をもって行動できるようにするとともに、市民の目線で検証し取り組みに生かす多面的・包括的な体制をつくることも必要と思われる。
●SDGs の達成期限まであと 8 年、SDGs という言葉の周知度は上がっているがまだ途上国の課題として誤解している風潮も残ってはいないだろうか。SDGs に対する認識を全世界で共有し、各分野での市民参加をすすめ政策に活かし実行することが急務であることを痛感した研修だった。

３　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

ジェンダー平等、気候危機の解決、貧困をなくすためのとりくみ、物価高騰から市内産業・事業所の営業を守るとりくみについて、より研鑽をつめるような学習が必要と考える。

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	丸田　絵美

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

市民「一人ひとりの SDGs」に向けて

～調布市全体で取り組む SDGs～　　横山泰治氏

２　実施結果に対する所感，意見等

（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

SDGs という単語は、最近特によく耳にする機会も多く、特に私たちにとっては通常活用する単語としてメジャーになっているが、表面上の単語ではなくどういった意味を込めて作られているのかを掘り下げて教えていただいた。

「ゴール」のイメージはどういったことか、という問いかけから始まり「そこが終わり」ではなく、そこに向けての行き先＝The global Goals であるということ。なぜ 2030 年なのかというと、そこが地球環境においての「不可逆ポイント」であるということを説かれていた。

まずは、2015 年 9 月の国連サミットで採択された経緯、2030 年に向けた 17 の大きな目標と、達成ための具体的な 169 のターゲットで構成されている。その内容を小さなグループに分け、具体例を挙げながらご説明頂いた。

誰一人として「取り残さない」社会という考え方は、「一人一人が大切であり、1 人として『欠かすことのできない』大切なパートナーである」という考え方である。作る責任と使う責任、認識をして生活をすることの重症性に「気づく」ことで行動を起こしていくことが最も重要ということであった。

Society1(狩猟社会)、Society2(農耕社会)、 Society3(工業社会)、Society4(情報社会)ここまでは「方法、手段、やり方」Society5,0 は「あり方」仮想空間（サイバー）と現実空間（フィジカル）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を目指すものである。本質を理解して優先課題を決定し、目標を政策に活かし、コミュニケーションを高めていく、目指していく課題に対してどのように考え、どのようにアプローチをかけるのかを探り、あり方、考え方をまとめてそれ

ぞれの行動に具体的につなげていく事が重要ということである。

まず「気づくこと」であるが、社会における様々な課題は、すべて繋がっているという点を理解することが大事。以前は良く「社会はジグソーパズルのようなものだ」、場所が変わればつながらないし、ピースが足りなくても、多くても仕上がらない。しかし、今の時代はもはや 2 次元的なものではなく、3 次元へと広がっている。「ジグソーパズル」ではなく「ルービックキューブのようなもの」と考えられている。想定を越えたところでつながっていき、時には相互に矛盾を生じさせてしまうこともある。本質を理解し、どことどこがどのようにつながり、ここを触ればこっちが動く、といった関連性を理解し、探り合いながらもひとつひとつ解決に向けて努力していくことが重要で、そのための重要なファクターが「気づき」である。

日本に目を向けてみると、ジェンダー平等が実現しない国という点で先進国の中では最低レベルにある。また、識字率は高いにもかかわらず、読解リテラシーが低いという特徴も挙げられた。作る責任、使う責任についても、誰もが考えているかという問い。例えばフードロスの取組で、「余ったから、いらないからあげるよ、というスタンスでは、もらう方はうれしいと思うか。限りある資源の有効活用の裏まで配慮が必要。資源に関しては、使ってはダメと説いていない。どのくらいの資源を自分のために使っているのか「把握・理解」が必要である。ここにも気づきが重要。目標の 2030 年に向け最後の 3 年に変革の方向性を見つけ舵を切るための重要な年 2023 年はスーパーイヤーである。SDGs の本質を理解し、気づき、優先課題を把握して目標・政策・コミュニケーションを構築していく事が私たちに課せられている。どの国が、誰が悪いというのでなく、現実起きていること一つ一つに注目し、気づき、問題視して言うことが求められている。残された不可逆の時間はあとわずかである。

3　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

前項の文中に記載のとおり。

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	清水　仁恵
１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）		
令和４年度　調布市議会議員研修 「市民「一人ひとりの SDGｓ」に向けて ～調布市全体で取り組む SDGｓ」について		
２　実施結果に対する所感，意見等 （質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）		

新型ウィルス感染症の影響により、過去に延期となっていた市議会議員研修が、テーマは変わらず改めて実施された。新型ウィルス感染症による混乱が未だ収束しない中、意義ある研修の機会を得られたことに感謝したい。

さて、この度の研修会では「市民「一人ひとりの SDGｓ」に向けて～調布市全体で取り組む SDGｓ」と題された、一般社団法人サステナブルコミュニティ共創機構代表理事で、パラダイムシフトコミュニケーショントレーナー・官民共創 SDGｓコーチとしても活躍される横山泰治氏による講演を拝聴した。

横山氏は調布市に在住されており、SDGｓ実現を標榜する調布市政への関心を高く持たれている方であり、市内においても SDGｓの観点から活動される方でもある。

この度の講演では、主に 2015 年に国連で採択された「2030 アジェンダ」に示された世界共通の課題であり、掲げられる理念でもある「誰一人取り残さない社会の実現」を目指すための持続可能な開発目標である「SDGｓの 17 の目標」について、横山氏は画像を用いながら私達に分かり易くご説明して下さった。ここでそれらを全て記述することは行わないが、横山氏は「SDGｓの 17 の目標」は、私達の暮らしに紐づいていることを強調して述べられたことを記しておきたい。

横山氏は直近に実施された「調布市民意識調査」において、「国連で採択された持続可能な開発目標 SDGｓを知っていますか」との調査項目が設けられていたことを大きく評価された。このことから、「市民意識調査」における該当項目の調査結果を調べてみたところ、

「SDGｓ達成に向けた公共・民間の取組を知っている」と答えた市民は 13.9%、「目標やターゲットの内容を知っている」と答えた市民は 11.5％、SDGｓに関するセミナーや活動に参加したことがある」と答えた市民は 1.2％と、ここまでで約四分の一の市民が SDGｓに対し何かしらの関心を寄せていることが伺えたが、以下「聞いたことはあるが内容は分からない」と答えた市民が 31.1％、「知らない」と答えた市民 37.7％と、約 7 割近い市民が分からない・知らないと答えている。

一方で、年齢層別に見た調査結果から興味深く注目したのだが「SDGｓ達成に向けた公共・民間の取組を知っている」「目標やターゲットの内容を知っている」と最も多く回答したのは、16～19 歳の層であり、その半数以上が SDGｓに関心を寄せているという事実である。「SDGｓ」に起因する若年世代の新たな視点を政策に取り入れることで、様々な社会課題に「無関心」となるのでは無く、「自分ごと」として考えるきっかけとになる可能性を感じる。「SDGｓ」が将来を担う世代にまちづくりへの参加を促すなどのアプローチのキーワードとなり得る期待を持つと同時に、基礎自治体が「SDGｓ」というキーワードを活用し、まちづくりの担い手を育成することでグローバルリーダーへと成長を遂げる可能性も感じられる。

また、調査結果の自由記述欄には「大切なことなのでもっと PR してほしい」「市としての取り組み状況や進展、結果についてもう少し具体的に情報を提出希望」とあった。高齢者層への調査結果から見る SDGｓへの興味関心の高さは伺えず、十分に浸透していないと言える。このことからも、今後市においては SDGｓの「理念」や「17 の目標」の市民への周知或いは目標達成のための道筋や取組を具体的に示すことが必要と考えるものである。

横山氏は SDGｓの目標達成のためには、本質を理解し課題を選択する行動が求められると述べられている。「SDGｓ」は社会課題を取り組むために相互協力できるパートナーを結びつける共通言語であり、複数の社会課題を同時解決へと導く可能性を持っているとも述べられ

第３号様式（第４関係）

た。SDGｓの目標達成年とされる 2030 年は、奇しくも次期調布市基本構想・基本計画が目指す 2030 年の調布の将来像とリンクする。現在基本構想・計画の検討が重ねられているが、SDGｓの理念が念頭に置かれた市民ひとりひとりが課題意識を持ち、アクションを起こせる新たな構想・計画となることを望むものである。
３　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）
全て文中に記載。

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	大野　祐司

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

「市民「一人ひとりのＳＤＧｓ」に向けて

～調布市全体で取り組むＳＤＧｓ～」

講師：一般社団法人ｻｽﾃｨﾅﾌﾞﾙｺﾐｭﾆﾃｨｰ共創機構代表理事　横山　泰治氏

２　実施結果に対する所感，意見等

（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

持続可能な開発目標の略で、2015 年 9 月 25 日の「国連持続可能な開発サミット」で採択され、2016 年 1 月 1 日に発行された国際社会共通の目標、１７の目標（ゴール）と、１６９の具体的なターゲット（取組・手段）で構成されていることを理解しました。

講師は、まち・ひと・しごと創生基本方針として、

〇新しい時代の流れを力にする、ものとして、

・地方創生ＳＤＧｓの実現などの持続可能なまちづくり

・地域におけるＳｏｃｉｅｔｙ5.0の推進

〇多様な人材の活躍を推進する、ものとして

・多様なひとびとの活躍による地方創生推進

・誰もが活躍する地域社会の推進

を挙げている。このことを踏まえ、ＳＤＧｓには下記の 3 つの本質があると説明している。

１．　不可分性

２．　誰一人取り残さない（弱さがあっても怖さがない）

３．　未来志向（バックキャスティング：未来から逆算した行動）

調布市は、基本構想の各項目に対し、ＳＤＧｓの開発目標との関係性をマトリックス表で現している。さらに具体的な開発目標に沿った取り組みが展開されてきています。

ＳＤＧｓについて、深く知ることができ、有意義な研修でした。

３　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）
他自治体や企業では、ＳＤＧｓ達成のための行動指針などを内外に提示し、市民や社員に分かりやすく目標設定している。 調布市としては積極的に具体的な目標や行動指針などを設定し、市民に分かりやすく、開発目標などを提示すべきと考えます。 例えば、 ① ラグビー、オリパラのレガシー継承 ② ゼロカーボンシティーの取組 ③ 防災・減災のまちづくり 　等 以上

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	狩野明彦

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

「 市民「 一人ひとりのＳ Ｄ Ｇ ｓ 」 に向けて
～調布市全体で取り組むＳＤＧｓ ～ 」
講　　師
一般社団法人サステナブルコミュニティ共創機構代表理事パラダイムシフトコミュニケーション®トレーナー
官民共創・ SDGs コーチ（ 「 2030 SDGs」・「 SDGs de 地方創生」・「 SDGs Get The Point」 公認ファシリテーター）
横 山 泰 治 氏

２　実施結果に対する所感，意見等
（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

ちょうど前日の７月 13 日、国が選定する「2020 年度 SDGｓ未来都市」「自治体 SDGｓモデル都市」である「松山市の SDGｓの取り組み」について行政視察を行ってきたところであった。

四国第一の都市であり県庁所在地でもある松山市は、2013 年に国から「環境モデル都市」に選定されるという素地があり、SDGｓを原動力とした地方創生の推進を官、民、マルチステークホルダー連家の枠組みを構築し取り組んでいた。（資料Ｐ23「まち・ひと・しごと創生総合戦略」2020 改訂版）

SDGｓに取組む入口として、

① 不可分性（トレードオフの解消、マルチベネフィット）

② 誰一人取り残さない（弱さがあっても怖さがない世界）

③ 未来志向（バックキャスティング）未来から逆算した行動

以上の SDGｓの３つの本質を理解されないと、その後の推進計画のすべてが機能しない状態になる。つまり、

１，３つの本質を理解　２，優先順位を含め課題を選択し（プライオリティ）
３，目標を設定（ターゲット）　４，政策を統合して（コンセプト）
５，相互に連携、報告を行う（コミュニケーション）
を順序通り進めていくこととあった。

その中で何よりも、行政及び市民の理解、意識の向上が重要であると考える。各所管課での個別計画を明らかにした上で、行政のSDGｓの取り組み状況を市民に伝える事。さらに、SDGｓの展開の仕方については、「知る・理解する」から「共有する・行動する」への進展を目指し、官民の連携組織の醸成、コミュニケーションの推進、次世代への浸透（SDGｓ教育）を図っていくべきと考える。

３　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

当日、質問をさせていただいたが「SDGｓを理解・共有する認知度向上の取り組み」や「SDGｓに向けて行動する取り組み」を推進するためのシステムとして松山市では、松山市役所内の「松山市 SDGｓ推進本部」、官民連携の「松山市SDGｓ推進協議会」、市民募集型の「松山市SDGｓサポーターズクラブ」、市内大学生を中心とした「松山市 SDGｓ推進コンダクター」などを教育の現場などで活用。官民双方並びに連携によるSDGｓ推進がなされていた。

目標やターゲットが明確であるSDGｓをツールとして活用することで、それらの共有を現実化し、参加と協働を実現することができると思う。

第３号様式(第４関係)

視察等個別部分報告書	作成者氏名	鈴木宗貴

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

市民「一人ひとりのＳＤＧｓ」に向けて
～調布市全体で取り組むＳＤＧｓ化ｒ
講師　　横　山　泰　治　氏

２　実施結果に対する所感，意見等
（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

ＳＤＧｓについての基礎講座として再認識した。

私が一般質問で、「自治体ＳＤＧｓへの取り組み」と「普及啓発」について質したのが、平成３０年第４回定例会であり、この際に、本日の講演での前半部分を簡略化し、ＳＤＧｓについて簡単解説している。

我が会派有志では、未来都市とモデル事業に共に選定された豊島区を数回視察し、視察項目はフェーズフリーやホール整備、公園整備だが、豊島区のＳＤＧｓ推進の柱となっている項目でもあることから、行政の推進体制を含めての先進した取り組みを学んできている。さらに、本研修の前日、７月１３日には、豊島区同様、未来都市とモデル事業に共に選定されている松山市にて、ＳＤＧｓの取り組みについて視察しており、部局を横断する推進組織や、講演にもあったマルチステークホルダー連携の枠組みの構築など、様々な地域資源を活用した、多様で独自のＳＤＧｓ推進について学んでいる。

３　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

本市における推進体制と、独自性が高く先進的なモデル事業の構築を早期に図ること。

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	橘　正俊

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

「市民「一人ひとりの SDGｓ」にむけて
～調布市全体で取り組む SDGｓ」

２　実施結果に対する所感，意見等
（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

２０１６年１月に「ＳＤＧｓ＝持続可能な開発目標」が発効され、目標達成期限の２０３０年まであと８年。ここ数年は新型コロナウイルス感染症の影響により、あらゆる面において世界中に影響を及ぼしている今日。日本においても地域経済や私たちの生活に大きな影響を及ぼしています。

そのような中、少子高齢化や人口減少・地域経済の縮小等の課題を克服するには地方創生ＳＤＧＳの取り組みが大事であることを改めて学ばせて頂きました。持続可能なまちづくりや地域活性化に向けて取り組みを推進するには、ＳＤＧｓの理念に沿って進めることにより、政策全体の最適化、地域課題解決の加速化という相乗効果が期待でき、地方創生の取り組みの充実・深化に繋げることができるものと考えます。

今なお世界では戦火が続き、経済・社会・環境の悪化はもとより、難民や貧困に苦しむ人々が増え続けるなか、ＳＤＧｓの本質である「誰一人取り残さない」社会をつくることが大事であり、その為にも今一度全人類の智慧を結集させなければならないと実感します。

今回の研修では、世界規模でのコロナ禍や戦争が起きているなかでＳＤＧｓの意義を改めて実感した次第です。そしてＳＤＧｓの１７のゴールについても、一つひとつ丁寧な説明を頂き大変ありがとうございました。

３　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

今後の課題

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	小林市之

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

演題「市民「一人ひとりの SDGs」にむけて
～調布市全体で取り組む SDGs～」
講師　一般社団法人サステナブルコミュニティ共創機構代表理事
パラダイムシフトコミュニケーショントレーナー　　横山泰治氏

２　実施結果に対する所感，意見等
（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

SDGs については、ある程度は知っているつもりであったが、SDGs の目標である１７のゴールについて、懇切丁寧にわかりやすく説明を聞く機会を得たことは、大変に有意義であった。日本全国で SDGs や地域創生の第一人者として活躍されている、講師である横山先生の自信に溢れて説明される姿勢に感銘を受け、SDGs の本質とは何かについて、少しでも理解ができたような思いである。

特に、SDGs を始めとする誰一人取り残さない社会の実現は、今や世界の共通の課題であり、SDGs はゴールに向かっていく羅針盤である。国連加盟 193 か国で 193 通りの道があり、調布には調布の道があるとのことである。

SDGs の本質を理解することの大事さを市民一人ひとりと共有し、市政に反映していきたい。

３　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

SDGs の目標１６「平和と公正をすべての人に」がある。世界には、難民と国内の避難民を合わせて、昨年末に 8930 万人とのことであり、第 2 次世界大戦後、最も多くなっており、日本の総人口（1 億 2550 万人）に近づいている。これはウクライナ危機で、膨大な数の人たちが家を追われたことも原因の一つであり、戦争や紛争は子どもたちや、その先の世代にも深刻な影響を与えてしまう。だからこそ、何よりも平和が大事だと思う。特に、難民が多い国々は、気候変動の被害を強く受けている場合があり、大雨や干ばつ

など、異常気象が起きると、人が住める場所が減り、農作物が取れなくなり食料が不足する。こうしたことが争いの原因にもなり、SDGs の課題はすべてつながっていると思う。このことについても、今後、勉強してまいりたい。

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	雨宮　幸男

１　視察（研修・~~視察研修~~）の実施名称（テーマ）

令和４年度調布市議会研修

「市民「一人ひとりの SDGs」に向けて

～調布市全体で取り組む SDGｓ～」

講師　一般社団法人サステナブルコミュニティ共創機構代表理事

パラダイムシフトコミュニケーション®トレーナー

官民共創・ＳＤＧｓコーチ（「2030　ＳＤＧｓ」・「ＳＤＧｓ　de　地方創生」・「ＳＤＧｓ　Get The Point 」公認ファシリテーター）

横山　泰治　氏

２　実施結果に対する所感，意見等

（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

SDGs とは「Sustinable Development Goais(持続可能な開発目標)」の略称で、2015 年 9 月に国連の持続可能な開発サミットで採択されたものだという。

１、 貧困をなくそう　２、飢餓をゼロに　などから　17、パートナーシップで目標を達成しよう　の 17 項目にわたる達成目標を掲げ、その実現目指す行動計画である。国連加盟国 193 か国が参加している計画で、2016 年か～2030 年の 15 年間で目標を達成するというもので、2030 年に向けた 17 の大きな目標と、それらを達成するための具体的な 169 のターゲットで構成されているものである。

２、 17 項目の目標の内容は貧困・飢餓の問題からジェンダー平等、気候・危機、平和の問題など、今日、地球規模で抱えているあらゆる分野（課題）での解決目標を掲げている。

３、 日本における貧困の急速な拡大が、特例貸付金の利用件数（金額）

の推移によって示されたが、その異常な増加ぶりには驚愕を覚えた。

また様ざまな指標（目標項目）で世界の中でも相当程度遅れた実態にあることも、改めて理解することができた。

４、ＳＤＧｓに掲げた目標項目はいずれも喫緊な地球的規模の課題であり、2030年までの15年間で達成する実現可能性は非常に厳しい状況にある事も、率直に感じざるを得ない。同時に国連加盟193国が問題解決の共同認識を持つに至っていることは、きわめて重要なことではないかとも考えている。世界中の諸国が同じ目標に向かって前進し、見るべき成果を上げる事、日本もその役割を十分果たすべく、地方政治の場からも取り組みを強める必要性を強く感じた。

【基調講演】

全体・共通報告の部分に委ねる！

３　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

17項目の目標そのものが、基本的には国や都道府県の取り組みとなることから、市政レベルで何ができるのかは中々難しい問題だが、様々な市政課題に対してＳＤＧｓの精神で取り組んでいくことは可能だし、その立場で議員活動に取り組んで行きたい。

第３号様式(第４関係)

視察等個別部分報告書	作成者氏名	宮本和実

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

【市民「１人ひとりのSDGｓ」に向けて
～調布市全体で取り組むSDGｓ～】

今回の研修会は、講師に横山泰治氏　一般社団法人サステナブルコミュニティ共創機構　代表理事　をお迎えし開催された。
内容は、①SDGｓとは何か　②取り組む上での重要な視点　について様々な事例を下に説明があった。

① SDGｓについては、２０１５年に開催された国連サミットにおいて、加盟国１９３カ国満場一致で可決された持続可能な開発目標であり、２０１６年～２０３０年の１５年間で達成する行動計画であり、１７の目標とそれらを達成するための具体的な１６９のターゲット、２３１の指標で構成されている。
貧困撲滅を中心とした考え方であり、あらゆる場所であらゆる形態の貧困に終止符を打つことがゴールとターゲットとして説明された。１７の目標については、それぞれ具体例を提示し説明された。

② SDGｓに取り組む上で大切なことは、３つの本質を理解することであり、SDGｓの本質が理解されないと課題選択、目標設定、政策統合、コミュニケーションのすべてが機能しない状態になる。
本質①不可分性　両立できない関係性の解消、複数課題の同時解決　本質②誰一人取り残さない（弱さがあっても怖さがない社会）現在のコロナ渦により脆弱な立場に置かれている人々が大きな影響を受け、今までの進歩が逆戻りする可能性が指摘されている。本質③未来志向（未来に立って今の行動を決める）現状を改善していくだけでなく、ありたい姿を実現するために今あるオプションとは異なる発想を引き出すことが重要である。

調布市に振り返って考えてみると、現在市として強く打ち出していることは「脱炭素社会に向けた取り組み」であるが、SDGｓの取り組みは１７の目標がありその課題選択が大切であり、３つの本

質を理解することが重要であると再確認できた。特に不可分性については、しっかりと理解し取り組まなければお題目だけが先走りして中身がついてこない危険性がある。脱炭素社会への取り組みにしても、市民や事業者の意識が変わらなければ役所だけの取り組みだけでは意味が無いと思う。残念ながら、まだ市が積極的に取り組もうと考えていることは市民の多くは知らないであろう。未来の姿を市民にも共有してもらえるような取り組みが必要と感じた。

貧困撲滅の観点からも、様々な課題選択に繋がり誰一人取り残さない、格差のない社会、ジェンダー平等などすべてに共通した方向性が見えてくる。未来を創造しその姿に向かって逆算した政策決定が重要であると思う。

今回の講義は、様々なことを気づかせていただいた内容であった。

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	大須賀　浩裕

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

テーマ：市民「一人ひとりの SDGs」に向けて～調布市全体で取り組む SDGs
講師：横山泰治氏

２　実施結果に対する所感，意見等
（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

講師が旧知の友人・横山泰治さんなので楽しみにしていた。
「SDGs の伝道師」として全国を講演しているだけに、体系立ててかつ分かりやすい説明だった。
自民党は昨年来３回にわたり豊島区を視察してきた。高野区長からも直接話をお聞きする機会もあり、区政の中心にSDGs を位置付けている豊島区の姿勢は大いに参考にするべきだと考える。区役所入り口の壁面には、SDGs の理念が大きく掲げられている。
調布市政においても、ほとんどの政策に SDGs のエキスがもっと反映されるべきだと思う。
市長の積極的な施策展開を期待したい。

３　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

横山泰治さんの益々のご活躍を楽しみにしている。

第３号様式（第４関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	元木　勇

１　視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）

2022 年 7 月 14 日　調布市文化会館たづくり８階たづくり映像シアター

市民「一人ひとりの SDGｓ」にむけて
～調布市全体で取り組む SDGｓ～

２　実施結果に対する所感，意見等
（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）

調布市での SDGｓの取り組みは 2018 年（H30）から開始。月１－２回のカードゲームなどを利用した「SDGｓ市民講座」を現在も継続して行う。

調布市が行った住民意識調査では全国、東京、神奈川での電通（29.1%）や朝日新聞（32.9%）の調査結果の認知度が令和元年は 1，5 倍、令和３年で 1，2 に急増した。

SDGｓ（エスディージーズ）とは（持続可能な開発目標）の略称です。

国連加盟 193 か国が 2016 年の 15 年間で達成する行動計画です。

３　その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

大変　有意義な研修でした。